

八百年前のウクライナ戦争

2022/5/18 安田公男

初めに

今より八百年遡る 1223 年、当時ウクライナという言葉はあったが、まだ現在の国を示すものではなかった。しかし、現在と同じ地域で歴史的な戦いがあった。チンギス・カン率いるモンゴル軍によるルーシ（現ロシア系民族の昔の名称）への攻撃である。「カルカ川の戦い」として知られるこの戦いは、モンゴル好きには良く知られているが、一般に話題になることは少ない。しかし、この戦役はアジアの勢力とヨーロッパの勢力が直接対決し、その後の国際情勢を大きく変えたものとして特筆すべきものである。それまでも、匈奴の末と考えられているフン族、柔然の末と考えられているアバル族、モンゴルと同時代のキプチャク族など、東アジア地域に本源を持つ人々の西欧世界への侵入があった。しかし、それら東方起源の民族は、既に東アジアの根拠地を失っており、悪く言えば流浪の民としての侵入であった。だがモンゴルは、東の根拠地を保ちながら、更に勢力を拡大して行く中での接触、という大きな違いがあった。チンギス・カンの息子オゴタイの時代には、モンゴル本国から大軍団を送ってキーフを陥落させ、ポーランド、ハンガリーを席卷した。応援に来たドイツ騎士団もリーグニッツで破った。ウイーンに向かおうとしていた矢先、本国でオゴタイがなくなり、モンゴル軍は後継者を決めるために兵を退いた。チンギス・カンの息子ジョチの子であるバトゥは現地に残ってルーシを従えて国を作った。父の名を取ってジョチ・ウルス（ジョチの国）と呼ばれる。ユーラシア大陸の東西が同一民族の政権で押えられるという、かつてない政治状況になった。しばらく後にクビライが漢土を制圧したので、ユーラシア大陸北部の東西が抵抗なく行き来できるようになった。中東もモンゴル政権が押えた。人と物の交流が大いに盛んになり、クビライが漢土に樹立した元朝には幾人かのヨーロッパ人が訪れて見聞録を残している。そこに書かれているアジアの富に憧れて大航海時代が始まった。歴史家の岡田英弘は、それまでの東西の歴史は地域史に過ぎず、真の意味での世界史が成立したのは、モンゴルの活動によってであると言う。そのようになる端緒であった、という意味で、この戦いの意義は大きい。

戦いの様相

当時チンギス・カン本隊は足かけ五年にわたる中央アジア諸国の攻略を行い、その目的を達成していた。ジェベ、スブタイという二将軍は、主敵であったホラズム国王アラー・ウッディーンを追っていたが、その行方を見失った。彼はカスピ海の孤島に逃れて亡くなっていたのである。その代わり、彼の息子のジャラル・ウッディーンが兵力を集めて立ち向かってきたので、チンギス・カン本隊が対応し、インダス河のほとりで破った。先王追跡の目標がなくなった二将軍は、約二万の軍勢を率いてホラサーン地方（現イランの東部）を荒らした後、カスピ海西岸に沿って北上した。コーカサス山脈を越えた所は草原となっており、キプチャクと呼ばれるトルコ系の人々の遊牧する地域であった。彼らの一派であるカンクリ族がホラズム国王アラー・ウッディーン達の出身

母体であったから、部族全体を従えようとしたのであろう。1222年、二将軍は策略も用いて彼らを制圧した。敗れたキプチャク人の一部は西に逃げて、それまで攻撃を加えていたルーシ人に助けを求めた。

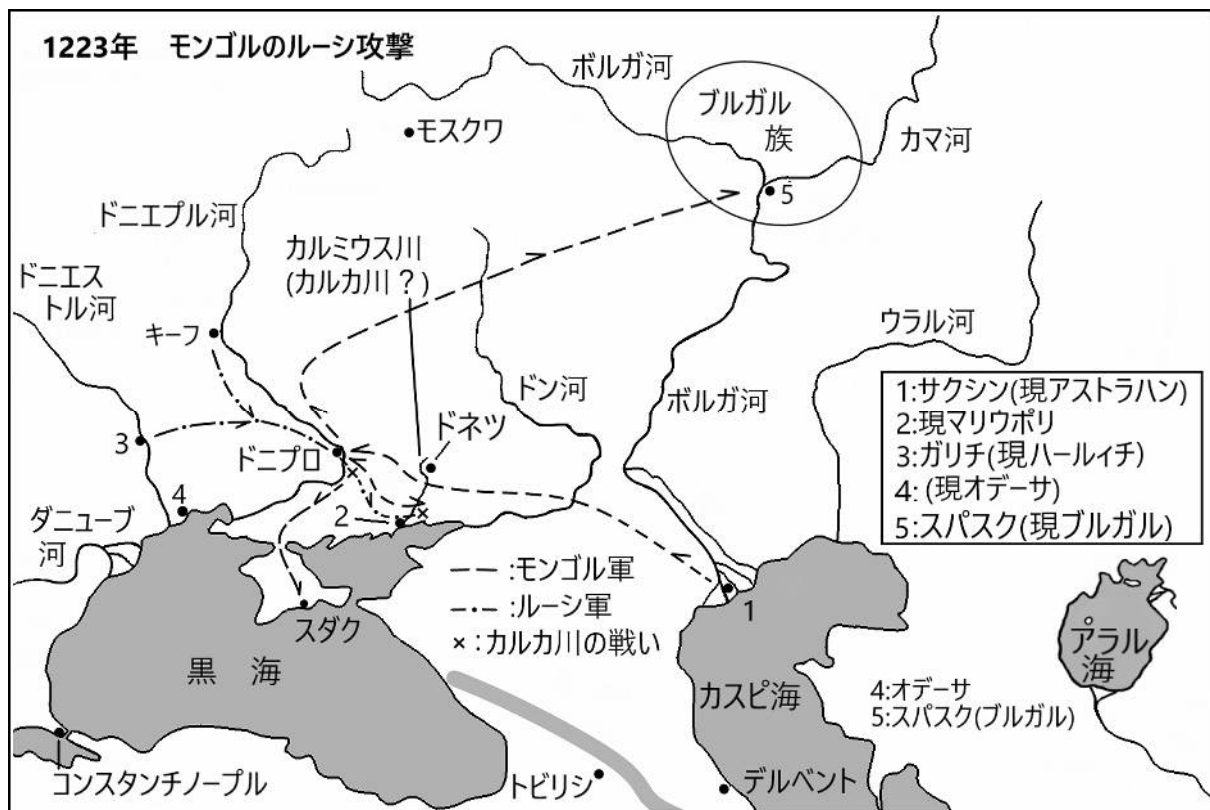
当時のルーシ人の本土は、北は現サンクト・ペテルブルグ辺りからドニエプル河の源流辺りからその西岸までであり、黒海に達していなかった。現ロシアのヨーロッパ地域、白ロシア、ウクライナの中中部地域である。南東は現ドニプロ辺りまでで、黒海沿岸はキプチャク人の遊牧地であった。交易のためにギリシャ系の人々が作った港町もあった。ルーシの国の中心は現キーフであり、当時のモスクワは森林地帯の小さな町であった。キーフの君主は大公と呼ばれていて、先代まではルーシの王と言って良いほど権力があつたが、当時の権力は弱まり、各地の自立性が強くなつていた。

二将軍は1223年春先、結氷しているドン河を渡り、ドネツ辺りを経てドニエプル河の東岸に着いた。ルーシはキーフ公の呼びかけで各地から軍勢が集結していた。モンゴルとルーシが話し合いをもったのは、ドニプロからザポリージャ付近と思われる。モンゴルは残ったキプチャク人を共に討伐しようと持ちかけた。しかし三万のルーシ軍は申し出を拒否した。モンゴルが中東を攻略しているとの情報が伝わっており、脅威を覚えていたのだろう。キプチャク族と同盟して共に河を渡ってモンゴルに迫った。モンゴル軍は二万の兵であり、倍以上の敵とまともに激突するのは不利であるから逃げた。優勢な敵とみるとモンゴル軍は逃げるのを恥じない。敵わないとみればそのまま全速で逃げるが、勝機ありとみれば攻撃を受けないように適度な間隔を空けて逃げる。ずっと追ってくるように微妙な距離を保ち、餌（貴重品）も蒔きながら遠ざかったのではなかろうか。そうしている間に敵が疲れてくるのを待つ。チャンスが来れば反転攻撃して、敵の戦力の薄くなったところを突く。小さいけれど確実な勝利を積み重ねていけば敵は精神的に圧迫されて総崩れになるのである。そのような作戦を可能にさせるための、騎馬での長期間の行動能力が身についていた。

大きな戦いが起きたのはカルカ川であった。この川はドネツの北方からアゾフ海沿岸のマリウポリに流れる、現在のカルミウス川、又はその西の支流のカリチク川ではないかと考えられている。ドニプロから200キロメートルあり、歩兵なら十日ほどは掛かる。河に着いた頃は騎馬隊のみが突出し、ルーシ軍は長く伸びた行軍体形になっていたと思われる。史書には、戦闘が全てカルカ川周辺で起きたように書かれているが、カルミウス川は平地を流れる河で、河口近くの高いところで幅30メートル足らずである。カリチク川はその支流だから似たようなもので、徒歩でも渡れる所のある川である。逃げた時、舟が必要だったと書かれているのと、援軍が来られなかったことからすれば、キエフ公が追い詰められたのは大河であるドニエプル河と考えるべきである。要するに、ドニプロ付近から退却したモンゴルを追って、ルーシ、キプチャク連合軍はカルカ川に至った。ガリチ公が突出したのは、モンゴルが隙と思える行動をわざとしたのであろう。ガリチ公は恐らく糧食問題があり、今しか攻撃の機会がないと思ひ戦いを挑んだ。だが、モンゴルの罠にはまってガリチ公軍は破れて退却途中、後続する軍とカルカ川周辺で交錯して混乱に陥った。チャンスとばかりモンゴルは猛攻を加える。ルーシも押し戻そうとしたであろうが、そこに留まって長く戦うと食糧不足に陥る。戦うのを諦めてドニプロ方面に退却し始めた。モンゴルは逃げるルーシをいたぶりながらドニエプル河岸に追い詰めた。ガリチ公は先に逃げて河を舟で越えたが、恐怖からモンゴルが追ってこられないようにと兩岸の舟を焼いたので、後続したルーシ軍は

困った。キエフ公は河岸に留まり砦を築いて三日間頑張ったが、援軍は来なかった。モンゴルは彼らと和を結んで安心させた後、捕縛し、板の下にキエフ公らを敷き、その上で戦勝祝いをして圧殺した。モンゴル軍が倍の敵に勝利したのは、5月31日のことであったと言う。

下図を見ても分かるように、2022年の戦争地域とほとんど同じである。



長距離遠征が当たり前のモンゴル軍は、百戦錬磨のジェベ、スブタイ将軍の指揮の下、一兵卒までが作戦の意味を良く理解して一糸乱れぬ戦闘を行った。長期間の行軍が出来ず、まとまりのなかったルーシの混成軍はやられてしまった、と理解すべきである。

ちなみに、ルーシの地、現在のウクライナは、紀元前8世紀、記録に残る最初の騎馬遊牧民スキタイ族（イラン系）の故地であった。それから約2000年後、進化した騎馬遊牧民となって、モンゴル軍はこの地に至ったのである。もっともモンゴル軍はそのようなことは知らなかったのも、特別な感慨を覚えたとは思えない。

以後、モンゴルは何の抵抗も受けずにルーシの土地を荒らした。ドニエプル河は渡れなかったもので、河の北東に出来ていた小さな町を襲ったのだろう。キプチャク族がいたクリミア半島にも進んで、ギリシャ人の町スタクにまで達した。町の住民は商人なので、なにがしかの貢ぎ物をして攻略を免れたと想像する。そこから引き返して北に向かった。現在のボルゴグラード辺りに、これもトルコ系のブルガル人の地があった。彼らの当時の中心地スパスクは、現ロシアのタタールスタン共和国ブルガルで、ボルガ河の支流カマ川の左岸にある。ボルガ河を越えないと行けないから、河の南西部にある彼らの住地を荒らしたのであろう。恐らくドン河が結氷して渡れるようになるまでの時間稼ぎのような作戦だったと思われる。この時点で、本軍に合流してモンゴル

本土に帰還するようにとの指示が来ていたのだろう。ブルガル遠征をほどほどの所で終えて、冬、結氷したドン河とボルガ河を渡って再びサクシンに戻ったと思われる。翌 1224 年、帰路に着いた。

モンゴル治下のルーシ

チンギス・カンの息子を祖とするウルスがいくつかでき、モンゴル皇帝の下、連合体の形をとっていた。チンギス・カンの孫バトゥの時代に、各ウルスが軍団を出し、バトゥが司令官、スベテイ将軍が補佐して西に向かった。キエフを陥落させた後、ポーランド、ハンガリーを攻略した。ウイーンに針路を向けようとしていたとき、二代目のカン、オゴタイの死の報がもたらされて、軍を退いた。バトゥはモンゴル本土に帰らず、キプチャク人、ルーシ人を従えて国を建てた。父の名を取ってジョチ・ウルス（ジョチの国）と呼ばれるが、キプチャック汗国、金帳汗国の別名もある。現ボルゴグラード付近にサライという都があった。遊牧民モンゴルは通商を重視する。中央アジア一帯がモンゴル領になったので、東西南北の交易はますます盛んになった。ルーシはその恩恵を受けて文明というものとの接触が増えた。モスクワは当時ルーシ人の中心地から離れ、森の中の小さな村であったのでモンゴルの興味を引かなかったが、周辺の町の徴税を請け負って発展していった。モンゴルは貢納を受ければ満足し、宗教などには口出ししなかったので、キリスト教会はルーシ時代より発展した。ロシア人は当時のことを「タタル（モンゴルのこと）の頸木」と言って、タタルの圧政を受けて発展が阻害されたように言う。しかし、それは西欧との繋がりが深くなってからのことであり、実際は、モンゴルによってルーシは文明世界へと導かれたのである。モンゴルはいくつかのウルスに別れて紛争もあったが、相互の繋がりは深く、最も豊かで宗主国的立場であった元朝は、当時の国際通貨である銀を各ウルスに与えるほどであった。現在のウクライナの貨幣単位フリブニャは、元朝から各ウルスに支給された銀の延べ棒の呼称が元になっているようだ。それを小さく分けたものがルーブルと呼ばれ、現ロシアの通貨単位である。

この地にやって来たモンゴル人は数が少なかったため、彼らは従えたキプチャック系の人々と同化していった。十五、六世紀頃から西欧では火器が発達し、騎馬軍団が劣勢に立たされるようになった。ジョチ・ウルスも内紛により分裂し、主客逆転し始めた。

コサック

その頃、戦乱が続いて困窮したポーランド、リトアニアなどの東ヨーロッパの人々と、遊牧民の中の自由を求める人々が、現在のウクライナ中部、ザポロージャ近くのドニエプル河の下流域に集まった。この辺りは遊牧民の襲撃を受けやすいので人が少なく、大地の恵みが豊かだったのである。彼らはそこに住み着いて混交し一つの勢力を作った。そして、自由民を表わすトルコ語であるコサックと呼ばれる集団となった。彼らはキリスト教を信じ、ロシア皇帝に従った。コラムにも載せたが、有名なレーピンの絵を示す。コサックがヨーロッパとアジアの混合集団であることが良く分かる。彼らが現ウクライナ人の基礎となった。オスマントルコとの関わり合いについてはここで述べない。



トルコのスルタンに手紙を書くザボロージャ・コサック 習作
出典元：IPA「教育用画像素材集サイト」



トルコのスルタンに手紙を書くザボロージャ・コサック 本作品
1890年
出典元：IPA「教育用画像素材集サイト」